

中山 哲志（なかやま さとし：応用心理学部福祉心理学）

主な担当授業：福祉心理学、障害者福祉、心理教育指導法Ⅱ（聴覚障害）

専門：福祉心理学、特別支援教育

第35話 福祉心理学ってどんなもの

●福祉心理学は心理学の応用分野の一つ

福祉心理学は応用心理学であり、1990年代から新しい学問分野として発展を続けました。社会福祉の主な対象として考えられる高齢者や障害者、社会的養護を受ける児童等、生きるうえで弱い立場で置かれがちな人びとに対する適切な支援を行うために心理学の面から考える学問です。同時に、福祉心理学はこうした立場に置かれがちな人びとに対してだけでなく、すべての人びとがより豊かに、幸福に生きることにつながる well-being（よりよい生き方、在り方）の考えにつながる学問であるとも言われています。

●どのように支援すればよいのか～ユマニチュードが教えること～

弱い立場に置かれた人びとを支援するには、さまざまな知識（理解）や技能や態度が必要になります。たとえば認知症高齢者の問題は、これからの社会を考えるうえでとても大きな課題であることが認識され始めましたが、支援方法についてはまだまだ未知の部分が多くあります。こうした状況のなかで、フランスで生まれた認知症ケアの考え方「ユマニチュード」は、「見る」「話しかける」「触れる」「立つ」という4つの方法が中心となって、認知症と言われる人びとの身体や心を柔軟にさせる魔法のような働きを持つ方法です。

すべての認知症患者に当てはまるかどうかはさらに実践が積み重ねられていく必要がありますが、関わり方（接し方）を変えると、表情が豊かになり、怒りっぽさが消え、意欲が出るような変化を示すのです。素晴らしい関わり方ですね。

●対象者を理解する～共生社会の実現にむけて～

ユマニチュードは、約30年以上にわたる実践のなかから生まれた方法ですが、その背景には医学や心理学などさまざまな関連する学問の応用があります。対象者をよく観察し、対象者の示す行動の意味を洞察し創り出された方法であるとも言えましょう。

これまであまり関心が持たれず、弱い立場のままに置かれがちな人びとへの理解を深めていくことは、共生社会の実現を目指すこれからの社会においてますます必要となるものでしょう。このことに福祉心理学は大いに貢献する力を持っています。

第36話 コミュニケーションと三項関係

●コミュニケーションと言語発達

人間はどのようにして言葉を覚えるのでしょうか。高校生の皆さんは小さい頃の自分がいつ頃どのようにして言葉を身につけてきたのかを覚えている人はいないでしょう。一般に1歳の誕生日を迎える前後から、意味のある言葉を発して本格的に言語の獲得が始まると言われています。覚えていないでしょうが、ご両親やご家族らの周囲からの働きかけのなかで、あるいはそれに応えるやりとりのなかで、コミュニケーションが活発になっていき、言葉の数が爆発的に増えるように身につけていったのでしょうか。このようにコミュニケーションが円滑にかつ活発に行われることによって言語発達が促進されていきます。

●障害とコミュニケーション

コミュニケーションという言葉の語源には「共有する」という意味があります。もしも子どもに何らかの障害があり円滑にコミュニケーションができないとしたら、他者との意思の共有が難しく、そのため言語面のみならず、認知活動全体に影響を受けます。生まれつき聴覚に障害があれば音声情報のやり取りに制約を受けるでしょうし、知的障害など言葉の理解に困難のある子どもたちは、意味の伝達が思うようにできないでしょう。

しかし、障害があってもそれを補償する支援方法（たとえば、代替方法）によってコミュニケーションを改善したり新たに創出したりすることができます。

●三項関係と情緒的つながり

その際、どのような方法を用いてもコミュニケーション行動の輪の中に三項関係が成立することが重要です。「自分（たとえば子ども）」「対象（たとえば桜の花）」「他者（たとえば母親）」の三項を頂点とする三角形の図を頭のなかで想像してみてください。目の前にきれいな桜の花（対象）が咲いていたとします。それを見た子どもと母親が情緒的なつながりをもとに気持ちを共有する意図的なコミュニケーションの経験をする。「きれいだね」「いっぱい」「咲いている」などの意味をジェスチャーや表情などの非言語的表現や言葉のやり取りによって確認する、まさにその気持ちの一つに共有されて初めてコミュニケーションが成立します。情動的なつながりのなかで経験が共有され、意味が確かめられ、やがて発達的に言葉が身につけられていく営みは、まさに心の働きそのものを表しています。